

「母」のフェミニスト現象学

—私の「母」としての生きられた経験から—

藤原 雪¹
増田 樹郎²

要約 本稿では、私自身の妊娠、出産、育児の経験をありのまま記述し、「母親」という枠を問い直す。まずは、これまで「母親」はどのような存在と捉えられてきたのか、整理する。社会の中にある「母親」のイメージと当事者の経験との間には、しばしばズレが生じる。三人称的に捉えられた「母親」の姿とは異なり、一人称的に母と子の関係性の中で悩みや葛藤を繰り返しながらも何度も揺れ動く「母」としてのあり方を描き出す。これまでの「母親」イメージを見つめ直し、誰しも引き受けることのできる「母」としてのあり方を模索する。

キーワード：母、現象学、フェミニスト現象学、ジェンダー

1 はじめに

私たちはある日突然外側から「母親」という役割を付与される。妊娠が発覚したとき、妊娠していることが見た目で見えるようになったとき、子どもが生まれたとき、「母親」となる。そして、自分のためではなく、子どものため、夫のためなど、他者のために生きることを求められる。「母親」とは何だろうか。日本社会の中では、未だに献身的な母親像が存在している。「良い母親」とは、「献身的で子どもを第一優先に考える親」である。現代では、女性の社会進出が進み、働きながら子育てをする女性も多く、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分担の意識は変化しつつある。しかし、表面的には女性の社会進出を認めつつも、それは、家事や育児を疎かにしない限りで、という条件が付されている³。「子どもがかわいそう」という理由から、母親の仕事や活動は制限される。例えば、残業が続いた際に男性は、「家庭のために仕事を頑張ってくれている」と評され、女性は「子どものことを蔑ろにしている」「子どもよりも自分のことが大事」と評価される。男性側が子どもを置いて飲みに行くことや出かけることに対しては、「(仕事の付き合いだから)仕方がない」となり、女性が同様のことをした場合に「子どものことを蔑ろにしている」「母親なのに我慢が足りない」と捉えられる。母親自身も自分の時間を持つことに対して罪悪感を持つことがある。「母親」

になると、ライフスタイルの変容を「父親」以上に求められる。育児においては、男女の非対称性が存在している。「母親」という概念そのものがジェンダー化されており、女性に子どもや夫のために献身的に生きることを、家事や育児は女性の方が向いている、という意識を植え付けている。

このような価値観の下で、虐待をするような母親は「母親失格だ」「自分の子どもにこんな酷いことができるなんて本当に母親なの？」と非難される。社会の持つ理想的な母親像に沿わない人間は「母親」として認められない。「母親」は子どもを慈しむことが当たり前であると捉えられている。

私は大学4年生の時に妊娠した。妊娠するまでは、「母親」という存在について深く考えたことすらなかった。私の母が唯一の「母親」のモデルであった。母は、自分のことよりも私や兄、父のことを優先して生きてきた。我が家は母が全ての家事・育児を担っていた。母はいわゆる「良い母親」だったのだと思う。自分を主張せずに、常に夫を立て、子ども達に合わせた選択をしていた⁴。母とは正反対で自己主張が強い私は子どもが生まれてからも基本的には自分のやりたいこと、目標、人生を優先している。家族や友人から「母親らしくない」と言われたことがある(今でも時折言われることがある)。その度に「母親」とは何だろうか、と自問自答を繰り返してきた。社会の中に存在している「母

¹ スクールソーシャルワーカー

² 愛知教育大学名誉教授

³ 「令和2年版 男女共同参画白書」の「夫婦の家事・育児・介護時間と仕事等時間の推移を見ると、女性は非正規雇用が多く、労働時間も短い。子どもに合わせた働き方を選択せざるを得ない状況があると考えられる。専業主婦世帯と共働き世帯とで男性の家事・育児時間は

変わらず、女性は仕事と家事・育児の二重役割を担うことになる。

⁴ 妊娠をするまでは、母はフルタイムで働いていたが、仕事を辞め、その後は私と兄の成長に合わせてパートタイムという働き方を選択していた。母の生活は子どもや父に合わせて成り立っていた。

親」のイメージと「母」⁵としての自分のあり方とのズレが生じ、生きづらさを抱えることとなった。私自身が感じたズレを契機として、「母親」という枠を問い直していきたい。

2 社会の中で作られた母親像と母性愛神話

「母親」には母性が備わっており、子どもを愛し、慈しむ能力があると考えられている。このような母性愛という概念は、社会的に作られたものであり⁶、母親に必ずしも備わっているものではないはずだが、私たちは母性というものが女性に備わっているはずだと思いつ込んでいっている。妊娠し、自分のお腹の中で育っていく胎児は、母と一体的なものであり、自然と子どもを慈しむ気持ちが育まれていくと考えられる。子どもと母親が一体的なものとして捉えられることで、やはり「育児は母親がすべきである」という意識を私たちに植え付ける。母性観が強調されることで、母親は益々子育てに縛りつけられる。母親は孤独に追いやられ、精神的に不安定となる。核家族化が進む現代において、子育ては母親が一人で担うことになり、その身体的・心理的なストレスから虐待という現象が引き起こされてしまうことがある。虐待が起こると、母親のみに矛先が向かうが、そこには「育児は母親がすべきである」という母性観の下に子育ての責任を母親のみに押しつけている社会の姿がある。学校現場でも子どもが何らかの問題行動（表面的には問題行動であっても、実際には子ども達のSOSである）を起こした場合に、「母親の頑張りが足りない」「母親がしっかりしていない」と母親を非難したり、反対に子どもがとてもしっかりしている子、成績の良い子などは「母親が頑張っている」「母親がしっかりしている」と母親のみを称賛する言葉もよく聞かれる。このような社会の下で母親は育児の

責任を一人で抱え込み、父親は子育てにおける無力さを感じる。

「イクメン⁷」という言葉が流行し、男性の育児休暇⁸についても注目されている。子どもを保育園に預けることも一般的になっており、育児は母親だけではない、という意識も出てきている。夫婦で子育てをすることが推奨されるだけでなく、積極的に保育園や幼稚園、ファミリーサポートセンター、放課後児童クラブなど地域の資源を積極的に活用することが推奨されている⁹。「育児は母親がすべきである」という規範は一見揺らいできたように思われる。

2020年に豪田トモ監督の『ママをやめてもいいですか!？』¹⁰が放映された。子育てに悩み、奮闘する母親のリアルな姿が描かれた。この映画の他にも母親のリアルな子育て事情を描いた漫画やSNS投稿が拡散されるなど、社会の中にある母親像を解体していくような動きが起こっている。社会の中に根強い母親規範（「育児は母親がすべき」「母親には母性が備わっている」など）が存在しているために、このような動きが様々なメディアを通じて台頭しているのだろう。

3 生きられた経験とは一現象学的研究の視点

本稿では、現象学的研究方法を用いて「母」を引き受けつつある私自身の「生きられた経験 (lived experience)」の記述を試みている。「生きられた経験」は「体験」や「経験」とは異なる。それらの違いを見ていながら、現象学的研究の視点について、整理していきたい。「体験」と「生きられた経験」の違いについて、村井(2000)は、「生きられた経験」は時間構造をもっており、経験は「生きられたもの」として反省的に捉えることで意味が割り与えられるとまとめている。「生きられている経験」が日本語の「体験」とほ

⁵ 本論文では、「母親」と「母」を使い分けている。「母親」は、社会の中で作られた抽象的なイメージ、偶像であり、普遍的なものである。「母」は、私たち一人ひとりが胎児、子どもとの関係性の中で揺れ動いている姿、状態であり、個別具体的なものである。また、「母親」はジェンダー化されたものであるが、「母」はジェンダー化されたものではなく、男/女という二元論を越えて、全ての人に開かれたものである。

⁶ 大日向(2015)は、日本社会に存在している母性愛神話には、「産む能力=育てる能力」説「三歳児神話」「聖母説」「母親イコール人間的成長説」というタイプがあることを指摘した。現在では、保育所に預けて仕事をする女性が増え、「三歳児神話」は衰退し、子育てに奮闘するリアルな女性を描いたコミックやエッセイ、ドキュメンタリー映画などが出現したことで、「聖母説」は揺らいできたように思う。しかし、子どもを産む母親と子に特別な絆を求め、やはり子育ては母親が向い

ている、という規範や子育てが女性として、人間としての成長、成熟に繋がるという考え方は根強く人々や社会の中に浸透している。

⁷ 子育てに積極的に参加する男性のこと。2010年に新語・流行語にトップテン入りし、急速に広まっていった。

⁸ 男性の育児休暇取得率は、厚生労働省の平成30年度雇用均等基本調査によると、8.6%となっており、年々増加している。

⁹ 平成27年4月に「子ども・子育て支援新制度」が始まり、子育てを社会全体で支える仕組みの充実が図られている。

¹⁰ 子育てに悩み、つまづきながら育児に奮闘するママたちと家族の歩みを記録したドキュメンタリー映画。産後鬱や子育ての孤独、夫婦のすれ違いなどをありのまま映し出している。

とんど同じものであると考えられる。「体験」が過去となり過ぎ去ってしまった「経験」は、「生きられた経験」としてしか捉えることができないのである。岩崎(2016)は、「生きられた経験」を、「意識の流れのなかで素朴に過ぎていく体験が、反省的な眼差しによって1つの統一体として捉えられる『意味のある体験』となること」(岩崎 2016:24)と定義づけている。岩崎は「意味のある体験」は「生きられた経験」であるとしている。つまり、ある「体験」は基本的には意識化されることなく、流れ去っていき、抽象化され、客観的(三人称的)に捉えられた「経験」となるが、反省的に捉えることでそれが「生きられた経験」となるのである。「生きられた経験」とは、「一人称の経験」「個別具体的な経験」と換言することができるだろう。

現象学とは、事象の本質を明らかにする研究であり、このような「生きられた経験」を明らかにすることが目指されている¹¹。では、なぜ現象学的研究は「生きられた経験」を明らかにすることを目指すのか。それは、研究対象として三人称的に捉えられた「経験」と当事者が実際に体験したことの間にはしばしば乖離があるためである。このような乖離については、脳性麻痺の当事者であり、現象学研究者である稲原(2018)が、友人に頼まれ、自分自身が研究協力者になったときの経験を記している¹²。インタビュー調査を行い、当事者たちの語りを用いた質的な研究であっても、このように当事者の語りと研究者が自分の枠に沿って、抽出し、客観的に分析した語りとの間には乖離が生じる。この乖離は、当事者の語りを客観的なデータとして個人の文脈から切りはなすことで、個別性が失われるために生じると考えられる。事象を蓋然的に捉えるのではなく、現象学においては、個別具体的な経験から事象の本質、構造を明らかにする。現象学は、研究者として

の三人称的な視点と当事者の一人称的な視点との間の乖離を乗り越え、融合させていくことを目指しているのだ。

4 女性の生きられた経験を当事者の視点から探求するフェミニスト現象学

私たちの生きられた経験はそれぞれ異なり、独自性を持ったものであるが、一方で共通性を持っている。現象学では私たちが共通の基盤として持っている「身体」に着目する。私たちは身体を通じて文化や習慣を身につけており、それらは私たちを支配している。私たちの感じる葛藤や矛盾は身体的なレベルで生じている。私自身が「母親」や「妻」となって起こった生きづらさや居心地の悪さは、ジェンダー役割への抵抗(問題視)と言うことだけではなく、社会に求められている「女性らしい」振る舞いとの間で身体的なレベルで葛藤を感じていたと考えられる。つまり、「母親」や「妻」として献身的に振る舞うことを求められているように感じ、献身的に振る舞おうとしたが、私の身体は拒否反応を示したのだらう。このように私たちの感じている葛藤は身体と密接に関わっているのである。

現象学において、これまで着目されてきた「身体」は、不変的で健康な男性の身体であった。女性の生きられた経験や、実存は全く無視されてきたのである。例えば、月経や妊娠、化粧、ファッションなどは扱われてこなかった。そこで、登場したのがフェミニスト現象学である¹³。フェミニスト現象学について、宮原(2018)は、「女性の経験を分析、検証するのみならず身体一般、人間一般をもより深く、広くとらえなおそうとする試み」(宮原 2018 :3)であるとしている。つまり、女性の身体的な経験を明らかにすることが「身体」そのものを問い直すことになるのだ¹⁴。私自身の経験を明らかに

¹¹ メルロ＝ポンティ(1967[1945])は現象学とは、本質(essences)を定義する学問であり、本質を存在(existence)につれ戻す学問であり、<生きられた>空間や時間や世界についての報告書である、と説明している。

¹² 稲原(2018)は、「『実際の私』と『友人の研究論文の中の私』が研究論文上で異なっていたことに私は違和感を覚えた。それは、三人称の私(研究対象者・客体)が一人称の私(生きた主体)から切り離されてしまったことに対して違和感を覚え、「MI」と記号化された三人称の私に対して拒否反応を示したということである。」(稲原 2018:34-35)と記している。当事者の経験と研究対象としての当事者の経験とはしばしば乖離があることが示唆されている。

¹³ フェミニスト現象学は、シモーヌ・ド・ボーヴォワール(1908-1986)に源流があると考えられる。ボーヴォワールが記した『第二の性』は、ボーヴォワールが女

性としての立場から自身の経験を交え、「女になる」というプロセスを分析しただけではなく、「女性」という存在そのものを問い直した。そこから、アイリス・マリオン・ヤング(1949-2006)やサンドラ・パートキー(1935-2016)、サラ・ヘイナマー(1960-)などに受け継がれていった。

¹⁴ 稲原(2015)は、「フェミニスト現象学的な身体論によって、健康な異性愛者の成人男性の身体を前提としてきた従来の現象学では記述できなかった『変容する』身体を捉えることができるようになった」(稲原 2015:1)と述べている。フェミニズムは従来政治的主張や規範理論に集中しており、現象学は女性の身体(変容する身体)を語ってこなかった。フェミニスト現象学は、フェミニズムと現象学の融合であり、それは、従来のフェミニズムと現象学を刷新していくものである。

することで、「母」を引き受けている、引き受けつつある、引き受ける可能性がある人々の経験へと開かれていく可能性がある。

さらに、稲原 (2020) は、「フェミニスト現象学は、従来の現象学的なアプローチに倣って、主観的な経験を記述するだけではなく、マイノリティ当事者にとって生活世界をより生きやすい環境に変えるための方法を見つけ出そうとする学問である。」(稲原 2020:98) と説明している。フェミニスト現象学は、個別具体的な経験である「生きられた経験」を明らかにするだけではなく、マジョリティによって作られた規範を見つめ直し、マイノリティ当事者が生きやすくなるための方法を模索する。私自身の経験を記述することで、同じように「母親」や「妻」の規範に縛られ、悩み苦しんでいる人、生きづらさを抱えている人々が生きやすくなるための支援、方法を考えていく一助としたい。

5 三人称的な「母親」と一人称的な「母」—私自身の妊娠、出産、育児の経験から

<妊娠期における「母親」のあり方と違和感>

2018年2月に当時交際していた男性との間に子どもを授かった。当時私は大学4年生で4月からは大学院への進学を予定していた。予定外の妊娠であったため、「母親」になることを素直に喜べなかった。その当時の私は自分が「母親」になるイメージが持てず、中絶をしようとしていた。しかし、エコー写真に写る小さな我が子の姿を見て、結局中絶することはできなかった。それは、「子どもを守りたい」という思いからではなく、中絶という選択の重みを痛感したためである¹⁵。妊娠した時点で「母親」としての自覚を持ち、「母親」として相応しい行動を取ろうとする人もいる。飲酒や

喫煙をやめ、服装や食事に気を配るなど、「母親」として胎児のことを第一に考えて、行動するようになる。そして、お腹の中にいる胎児に思いを馳せて、胎児に名前をつけたり、ベビー服やスタイを手作りする人もいる¹⁶。私は自分のお腹にいる子どもの存在、「母親」になるということを受け入れられずにいた。初めて胎動を感じた瞬間も、違和感しか持てなかった¹⁷。日々大きくなるお腹、胎動を煩わしいとさえ思っていた。「母親」であれば、胎児の成長を嬉しいと思うはずなのに、私は「母親」ではないのだろうか、私は「母親」になれるのだろうか、と不安や悩みがつきなかった。

「母親」としての自覚はなくとも、「母親」のような行動を取ってみれば何かが変わるかもしれないと思い、ベビー用品店に入り、子どものために服を選んでみたこともある。しかし、やはり私はその行動を楽しみ、幸せだと思えなかった。一般的な「母親」になろうとすればするほど、違和感を強く感じた。結局、妊娠中に私は「母親」にはなれなかったと感じている。客観的には、毎回妊婦健診に通い、エコー写真を愛おしそうに見つめ、大きくなったお腹をなで、胎児に声かけをしている私は「母親」に見えていたのかもしれない。しかし、実際には「母親」のような振る舞いを演じて見せていただけなのである。

<「母親」に対する違和感の身体化>

12時間に及ぶ陣痛を耐え抜き、無事に出産を迎えたとき、自分のお腹の中から出てきた息子を見て、ようやく自分は「母親」になったのだ、という実感を得た。入院をしている間は、一時的に心が落ち着き、小さな息子を思えた。しかし、退院後1週間ほど私はとても激しい下痢に襲われた。脱水症状になり、黒便が出る

¹⁵ 中絶は女性の権利である、という見方もあるが、中絶はいけないことである、という規範が自分の中に存在していた。高校生の時に保健の授業で中絶した女性の手記を読んだ。具体的な内容は覚えていないが、中絶という選択をした女性が胎児の命を絶ってしまったという事実に関心、苦しんでいる思いが綴られていた。中絶という選択の重みを伝え、性行為をするときには避妊すべきことを伝えなかったのだろうか、中絶は「人殺し」であり、いけないことだというメッセージを受け取った。私は自分を人殺しにしたくない、他者から責められたくない、という思いで妊娠の継続を選択したのである。社会的に「中絶」というものがいけないこと、隠さなければならないこと、となっているため中絶したこと、中絶しようか悩んでいることを相談することができない。このような「中絶」の語りづらさも大きな課題といえるだろう。

¹⁶ 私は胎児の洋服を作ったり、胎児にニックネームをつけるのは、胎児の実感が強いためであると考えてい

たが、自身の妊娠の経験を分析した宮原 (2020) によると、胎児の実感や具体性の欠落を埋めようとするような行動を取っている、という。何とか胎児を感じ、胎児と関係しようとするすることで、自分自身が「母親」であることを実感できる。最初から「母親」としての自覚を持って行動していたのではなく、私と同様に「母親」になろうともがいていたのかもしれない。

¹⁷ ヤングは (1984) は妊婦の身体経験について、自身の妊娠の経験から分析した。胎動は、私の感覚であると同時にそれは私の内部にある胎児の動きであり、胎児の感覚に根ざしている。自己と胎児は完全に分けることはできず、両義的な関係性にある。このように妊婦は特殊な身体経験をしており、自己と他者の境界が曖昧になるという経験をしている。しかし、私は胎動を感じた時にいつも違和感を持つとともに、私と胎児は一体的なものではなく異なる存在であると感じ、自己と他者の境界を強烈に意識することとなった。

ほど激しいもので、その間子どものお世話をすることができなかつた。私の母が息子のお世話をしている姿を見ると、「母親」としてやっていく自信がなくなり、不安で仕方がなかつた。もともと子どもの泣き声が苦手だった私は、毎日家の中で息子の泣き声を聞くのが苦痛で仕方がなく、息子を愛おしいと思えなかつた。病院で点滴を打ってもらいながらこれから長く続いていく「母親」としての人生に絶望を感じ、ずっと涙を流していた。

産後1年が経った頃は息子の激しい夜泣きと離婚とが重なり、身体的、心理的に苦しい状況の中で再度激しい下痢に襲われた。この頃の私は、子どものことを考える余裕がなかつた。激しく夜泣きをする息子の口をふさぎそうになったこともある。そのような衝動を抑えるために、自分の頭を窓に激しく打ち付けたり、自分の頬を殴ることで気持ちを落ち着けようとしていた。泣き叫ぶ息子連れて、夜中にドライブをしていた時はこのまま一緒に死んでしまおうか、と何度も考えていた。子育てのすべてがうまくいかない私は「母親」失格であり、「母親」にはなれない、向いていないと思っていた。息子が1歳になった時点でもやはり、私は「母親」になれていなかったのである。社会の中に存在している理想像としての「母親」と私のあり方はいつもズレていた。その葛藤や矛盾が2度の激しい下痢という身体症状として表われたのかもしれない。

<「母」としての自分を引き受け始める>

息子は2歳になった。私は今年度から社会人となり、社会福祉士として働く中で、「母親」に縛られ、悩み苦しんでいる人々の声を聞いた。私と同じように悩み、葛藤を抱えながら揺れ動いている「母」の存在を目の当たりにした。「母親」のイメージを内在化し、それが「母親ならば〇〇しなければならない」という規範となって自分自身の首を絞めてしまうのだ。そのことに気付く、私は「母親」になろうともがくのはやめた。私は「母親」にはなれないし、なる必要もない。社会から与えられた「母親」ではなく、私と息子との関係性の中でゆっくりと「母」になっていけば良いのだ¹⁸。このようにして「母親」としてのあり方から完全に解放されたわ

けではないが、私は三人称的に役割として与えられた「母親」ではなく、息子との関係性の中で「母」としての自分を引き受け始めた。母親としての感情として「〇〇しなければならない」ではなく、私自身の感情として「〇〇したい」「〇〇してあげたい」と思ったことを素直にしていく。私は自分自身の人生を大切にしつつも、息子とも向き合っていく時間を持てるようになった。当初描いていたような献身的な「母親」ではないが、これが私の「母」のスタイルなのだろう。「自分の子どもはかわいい」というポジティブな感情だけではなく、しばしば「自分の子どもをかわいいと思えない」「自分の子どもを愛おしいと思えない」というネガティブな感情を抱くこともあるだろう。それも子どもとの関係性の中で生まれる自然な「母」としての感情である。私は妊娠中、産後、産後1年経った時も「母親」にはなれないと思っていたが、悩み苦しむ姿、状態も1つの「母」のあり方だったのである。私たちはそれぞれの仕方でも時折、迷い葛藤しながらも「母」となっていくのだ。

6「母」の唯一性と多数性

「母」とは、子どもとの関係性の中でなっていくもので、決まった型や正解ではなく、揺れ動いていくものである。完璧な「母親」を目指せば目指すほど理想と現実とのギャップに打ちひしがれることになるだろう。母と子は別の人格であり、子どもは自分の思い通りにはならない。予想外の出来事の連続である。このような予測不可能な育児を一人で担おうとするのは、現実的ではない。「女性だから…」「母親だから…」「専業主婦だから…」といて子育てを一人で担う必要は無いのだ。周りに頼ることができない「孤育て（孤独な育児）」は私たちの心身を蝕んでいく。私自身妊娠中、子育て中に幾度となく孤独を感じた。世界（社会やコミュニティ）とのつながりが断ち切れ、一人取り残されたような感覚を持った¹⁹。孤独を感じると、生きていること自体が辛くなり、子どもと向き合う気力がなくなってしまう。育児における孤立や孤独から産後鬱を発症してしまうことや虐待を引き起こしてしまうことがある。妊娠中は変わりゆく身体の中で心が不安

¹⁸ 桂ノ口(2016)は、「母」について、相手(子)との関係性の中でリアルタイムで揺さぶられ続けている「状態」のうちの一つが「母」であって、「わたし」ではないところから突然当てはめられるようなものではないことを指摘している。このように「母」は、「母親」のように三人称的に役割として与えられるものではなく、日々子どもとの関係性の中で常に揺れ動いている「状態」を差しており、それは不安定で不確かなものなのである。

¹⁹ これまで当たり前できていた「学校へ行き、学生同士で会話する、一緒に授業を受ける」「アルバイトで接客をする」「コンビニへ行き、店員さんと何気ない会話をする」という行為ができなくなり、人とのつながりやコミュニケーションが突然無くなることで猛烈な不安を感じた。普段は意識していなかったが、私は実に多くの社会とつながりをもっていたのだ。それが突如としてできなくなることで、世界の中に私の居場所がなくなったように感じた。

定になり、産後はこれまでの生活スタイルの変更や慣れない育児に戸惑い、不安を感じることもある。日々成長してゆく子ども達の前に何度も自身のあり方、子どもとの接し方を問い直さなければならないのだ。妊娠は喜ばしい出来事であるが、それ以上に不安や葛藤があり、人生における危機ともなりうる。妊娠や出産、育児には悩みが尽きない。一人で抱え込んでいると、どんどん泥沼にはまってしまい、抜け出せなくなってしまう。一人で考えていると、自分の中にある思い込みや捉われに気づかず、自分で自分を苦しめてしまう。他者と対話をする中で、自身の悩みを一人で抱え込まず、共有することができる。さらに自分自身の悩みを外在化し、俯瞰してみる事が可能となる。自分とは異なる意見を聞くことで、凝り固まっていた自分自身の思考から解放され、新しい世界の見え方、接し方を獲得できるかもしれない²⁰。

「生みの母」「育ての母」は代替不可能で、子どもにとって唯一無二の大切な存在である。しかし、「母」は唯一性をもちつつも、私たちは誰でも引き受けることができるものである。子どもを生むこと、継続的に子育てをするだけが「母」となる条件ではない。私はこれまでパートナーや祖父母、友人、ボランティア（大学院生時代、学内で託児ボランティアを募集し、授業の間に子どもを見てもらっていた）、保育所の先生など多くの人々に支えられてきた。それぞれの人々がそれぞれの仕方息子と向き合い、迷い葛藤しているとき、「母」となっているのだろう。直接的に子育てを手伝うだけではなく、子どものことについて、一緒に悩み、考えてくれる人々の姿も一つの「母」のあり方である。「母」はすべての人に開かれており、決まったスタイルはないのだ。このような「母」の多数性、柔軟性に注目することで、他者に頼りやすくなるだけでなく、多くの人々が子育てに参入しやすくなる。そこで初めて、子育ては地域で、社会全体で向き合っていく問題だという意識が生まれるのではないだろうか。

7. おわりに

本稿は大学院時代に執筆した修士論文を軸にしつつ、内容に関しては大幅に修正をしている。修士論文では、20代前半で妊娠・出産をした女性5名との対話を通して、自身の経験とすり合せながら解釈を行った。私自

身20代前半で妊娠・出産し、様々な不安や困難、葛藤を経験した。10代での妊娠・出産は社会問題として捉えられ、様々な研究がなされてきているが、20代前半での妊娠・出産に関してはほとんど研究されていなかった。実際には、20代前半は、人工妊娠中絶の割合が最も高く、婚姻関係にない相手との妊娠である場合も多く、様々な困難に直面することが考えられる。そのため、まずは20代前半の女性の妊娠・出産の現状を詳らかにしようと試みた。20代前半での妊娠は予想外である場合も多かったが、自分自身やパートナー、周りの人々の妊娠の受け入れによって、その困難さは変わってくる。自分や身近な他者が妊娠に対してネガティブな感情を抱いていた場合には、自分自身、他者との間で何度も葛藤を経験することになり、心理的に不安定になる。それでも支えてくれる存在がいることで、妊娠を継続することができる。20代前半で妊娠・出産をした女性との対話を通して、私の中では、20代前半で妊娠・出産したことというよりも、突如として「母親」役割を与えられたことによる不安や葛藤が大きかったのだ、ということに気がついた。そのため、本稿では私自身の個別具体的な経験に立ち返り、「母親」という枠組みを問い直しただけではなく、「母」としての自分自身の生き方を見つめ直した。本論文は極めて実験的なものであり、論文の問題点は数え切れない。たとえば、全体として「母親」と「母」という概念だけを用いた限定的なものとなっており、「父親」「父」「親」「両親」という概念の整理も必要だろう。人称性については、三人称の「母親」、一人称の「母」という関係性だけで論じたため、平板なものとなっている。「母—子」の二人称の位相を加えることでより立体的に「母」論を展開していくことが必要だろう。私自身の「母」としての人生は今後も続いていく。「母」の当事者として、「母」を支える専門職として、今度も「母」の探求を続けていきたい。

【引用・参考文献】

Iris M. Young, "Pregnant Embodiment: Subjectivity and Alienation, On Female Body Experience: Throwing Like a Girl and Other Essays, Oxford University Press, [1980]2005, 46-61.

²⁰ 私は妊娠中、産後と「哲学カフェ」に参加していた。「哲学カフェ」は、哲学者マルク・ソーテ(1947年-1998年)が、1992年にフランス・パリのカフェ・デ・ファールで始めた対話の実践である。日本でも広がり、カフェやコミュニティスペース、学校など、多様な場で哲学カフェが開催されている(現在はオンラインで開催している団体も多い)。すべての人が参加できる哲学カフェと参加できる人が限定されているピア

グループのような形の哲学カフェもある。私が参加していた哲学カフェはシングルマザーの支援団体である神戸市長田区にあるWACCAで開催されているセミクローズドな形での哲学カフェだった。哲学カフェに参加し、他者と対話を重ねる中で自分自身の不安や葛藤を外在化し、客観的に捉えることができるようになった。

- 稲原美苗 (2015) 「フェミニスト現象学における障害の身体論の展開：哲学的当事者研究の可能性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』55.1-18.
- 稲原美苗 (2020) 「なぜ今、フェミニスト現象学なのか？—展開と挑戦—」『フェミニスト現象学入門—経験から「普通」を問い直す』. ナカニシヤ出版.
- 岩崎久志 (2016) 「「生きられた経験」を明らかにする現象学的考察の検討」『流通科学大学論集—人間・社会・自然編』29(1).11-28.
- 大日向雅美 (2015) 『母性愛神話の罨』. 日本評論社.
- 桂ノ口結衣 (2016) 「あんたも、母—フェミニスト現象学を手がかりとした「母」についての考察」『メタフュシカ』47.77-91.
- 雇用均等基本調査. 平成 30 年度. 厚生労働省.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-30r/07.pdf> (参照 2021-1-11)
- 男女共同参画白書 (概要). 令和 2 年度. 内閣府.
[r02_gaiyou.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/equal_society/white_paper/2020/) (gender.go.jp) (参照 2021-1-11)
- 松葉祥一・西村ユミ (2014) 『現象学的看護研究—理論と分析の実際』. 医学書院.
- 宮原優 (2018) 「妊娠期における身体図式の変容および胎児との関係についての現象学的記述」『公開ワークショップ：身体的経験をめぐる人類学と現象学からのアプローチ—不完全な身体、人種と身体、妊娠期の身体の事例から』1-13.
- 宮原優 (2020) 「妊娠とは、お腹が大きくなることなのだろうか？—妊娠のフェミニスト現象学」『フェミニスト現象学入門—経験から「普通」を問い直す』. ナカニシヤ出版.
- 村井尚子 (2000) 「ヴァン＝マーネンにおける「生きられた経験」の現象学的探求」『京都大学大学院教育学研究科』46.348-360.
- メルロ＝ポンティ・M (著). 1967. 『知覚の現象学 1』みすず書房.
- 森本誠一 (2013) 「公共的対話としての哲学カフェ」『Humanitas』(38).35-46.